

旧篠崎家住宅主屋



〔指定年月日〕昭和六一年八月二十六日

〔種別〕有形文化財（建造物）

〔名称〕旧篠崎家住宅主屋

〔点数〕一棟

〔所有者等〕杉並区教育委員会

〔所在地等〕大宮一―二〇―八（郷土博物館内）

旧篠崎家住宅主屋

木造平家、平入の寄棟造りで、中央に「ヒロマ」を設け、向って右に土間の「ダイドコロ」、左に「デイ」「ナンド」と三つに区分した三間取りヒロマ型の建物である。大きさは桁行一二・七四m（七間）、梁間六・三七m（三・五間）、面積八六・一五㎡である。

この建物は下井草村字中瀬の本百姓であった篠崎家（天保二年（一八三一）に惣高（二石四斗）の主屋で、昭和四九年（一九七四）に解体され、平成元年（一九八九）に現在地に移築、復元されたものである。構造的には柱の配置が土間と居室境では一間おき、ヒロマでは七・五尺おきであり、ヒロマとデイ境にも柱を入れ、また間仕切りに差し鴨居を用いないなど、古風な作り方を示している。建築年代は確実な資料が見当たらないが、間取り型式、構造、材料、材の風化状態、江戸時代の篠崎家の経済状態などの諸点から推定して、寛政年間（一七八九〜一八〇一）頃の建築と思われる。

この主屋は江戸時代後期の典型的な本百姓階層の農家で、武蔵野台地の農家住宅の特徴をよく残している。建築史上のみならず、当時の農民生活が知られる数少ない遺構である。

【文化財所在地】

